

第4節 A supplementary explanation—Further Information

チャップリンの補足説明として何を書こうかと考えたが、学生の中にはチャップリン映画を見たこともない人もいるかもしれないと思い、私が見た映画の中で、強く人間愛を唱ったものとして次の6点を紹介する。

次の①、②、⑥は人への愛を中心に、④、⑤は戦争という問題を取り上げ、平和への願いを訴えたものであり、③は機械化の中での人間という問題を主題にしており、すべて根底には人間というテーマが横たわっている。全体を通して、チャップリンの映画をまとめて言えば次のようになる。

Chaplin told about the essence of life and love. He wanted to speak about the despair of the human race and the beauty of love. He also wanted to speak about the kindness of human beings. (*6: p30)

{【浜田訳文例】チャップリンは人生と愛の神髄について語った。彼は、人類の絶望と愛の美しさについて語りたがっていた。彼は、また、人間の優しさについても語りたがっていた}

※[ésns]神髄、本質

①The Kid: 1920

この映画を作るにあたってチャップリンは次のような構想を抱いていた。



当初 (*4:p42) も著作権上Wikipediaからの抜粋に置換え

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AD%E3%83%83%E3%83%89_\(1921%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AD%E3%83%83%E3%83%89_(1921%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB))

"I want to make a serious picture," he said, "with irony, pity, satire underlying a comic or funny story." (*5: p34)

{【浜田訳文例】「私は、厳粛な芸術的映画を製作したい」、それも「喜劇あるいは面白い話に裏打ちされた皮肉、憐れみ、風刺のある映画を」と、彼は語った。}

※[sætaiə]風刺、underlying=の基礎となる、背景にある。

それがこの映画である。この映画は次のタイトルで始まる。

「ほほえみと、そしておそらくは一粒の涙とともにごらんになる映画——その女の罪は母であることでした」。

浮浪者チャップリンがふとしたことから、捨てられていた赤ん坊を拾い上げ育てることになった。やがて5年の月日が流れ少年（キッド）は成長する。

「さて、仕事に出かける二人。キッドは商店の窓ガラスに石を投げてガラスを壊す役。そしてガラス屋になった浮浪者（チャップリン）が、修繕し、なにがしかのお金をかせぐという新商売は大繁盛」(*8: p125)。

だが少年が孤児院に引き取られることになり、少年が「行くのをいやがり、泣き叫んで泣かせる迫真」(*8: p124)のシーンとなる。そして、別れの場面については桐原書店の『CHARLIE CHAPLIN』(*5)では次のように書かれている。

"In the farewell scene at end people took the kid from the tramp's arms and sent him by car to a charitable institution. At that moment a look of bewilderment and despair came into the tramp's face." (*5: pp34-35)

{【浜田訳文例】映画の結末の別れのシーンでは、人々が放浪者の腕から子供を引き離し、車で彼を慈善救済施設へと連れて行った。その瞬間に、当惑と絶望の表情が放浪者の顔に表れた。}

※[fæwél]別れ、[bewıldərment]当惑

この映画は、人と人との間の人情味豊かな笑いの秀作と言われている。

[②City Lights: 1931]

この映画はチャップリンが同じシーンを50回も取り直したり、また、He worked—and worried—for two years to make it. He used 96,694 metres of film to make the final 2,490 metres that went to the cinemas. He wanted it to be a perfect film, and he shot scenes again and again. (*4: p48)

{【浜田訳文例】 彼はこの映画を制作するために2年間——苦悩し——働いた。

彼は、映画館で上映される段には最終的に2,490メートルにするために、96,694メートルものフィルムを使用した。彼は完璧な映画にしたいと、何度も何度も場面を撮り直した} と言われている。この映画はチャップリンの人間への愛をうたったもので「Beauty exists in sadness.」(美は悲しみの中にある)が主題の映画である。

内容を簡単に書くと「一人の浮浪者が町角で花を売っている美しい娘に出会った。娘は盲目であった。浮浪者の胸をさぐりながら一輪のバラの花をさしてくれた。浮浪者は、娘の手をとって彼女の家まで送って行った。それ以来、浮浪者は彼女に恋をしてしまった。彼女の目をなんとかしてなおしてやろう……浮浪者はそう心に誓った」(*8: p132)。

彼は手術代を稼ぐためにあらゆることをなし、お金を手にすることができた。こうして、彼は彼女にそのお金を手渡すが、誤解から刑務所に入れられるはめになる。「そして何年かたった。出獄した浮浪者は一軒の花屋を目にした。そこで働く美しい娘こそ、目もなおったあの人ではないか！花屋の前を行き来するみすばらしい浮浪者」。そして、……。

A beautiful girl, who had had her eye sight restored by an operation, came across a tramp, her benefactor, being teased by children in the park. She was surprised and felt sorry for him. The tramp loved her, but she only saw him as a tramp. Then he experienced his worst misfortune in losing both his love and his pride together. Uneasiness, sadness and restlessness were reflected in his eyes. (*5: p43)

{【浜田訳文例】 手術で視力を回復した、美しい娘は、一人の浮浪者に、即ち、公園で子供達にからかわれていた恩人に出くわした。彼女は驚き、彼を気の毒に思った。放浪者は彼女を愛していたが、彼女は彼を浮浪者として見ていただけであった。その時に、彼は彼の愛と誇りを同時に失うという彼の人生の中で最悪の不幸を経験した。不安、悲しみ、そして動揺が、彼の目に浮かぶ。

※ ○→出くわす：[bénifæktə]恩人 : uneasiness=不安 : [restlís]落ち着かないこと}

だが、「彼を見て娘は、一輪の花と小銭を与えた。ふとふれあった手と手——ああ、この感触こそ、忘れもしないあの人の手のあたたかさだった。『あなただったのね——』」。(*8: p133)

[③Modern Times: 1936]

この映画は、「オートメーションと人間の管理化、機械による人間喪失という現代文明の危機を40年もまえに描いた」(*8: p136)もので、「今日ますます痛烈で、新鮮な輝きを見せている」(*8: p136)とされている。チャップリンがこの映画をつくる動機となったことについて桐原書店の『CHARLIE CHAPLIN』(*5)は次のように述べている。

One day a reporter told Charlie harrowing stories of healthy young men from the farms who, after several years of work at the factory-belt system in Detroit, had become nervous wrecks. This led him to create his last silent film, "Modern times" as a caricature of the age of mechanization. (*5: p45)

【浜田訳文例】ある日、一人のレポーターが、農村からやって来た健康な若者の悲惨な物語をチャーリーに語った。この青年はデトロイトでベルトコンベアシステムの仕事に数年間従事した後で神経衰弱となっていた。チャーリーはこの話を聞いて、機械時代の風刺として、最後のサイレント映画『モダンタイムズ』をつくることを思いついた。

※[hárou]~を悩ます、苦しめる : nervous wrecks=神経衰弱 : [kærikətjúə]風刺。

この映画は、今日の機械文明の中での人間というものを主題にした映画である。歯車の中にはまりこんだチャップリン(左下の写真)とラストシーンで一人ではなく彼女とまっすぐな道をどこまでも歩くチャップリン(右下の写真)がコントラストを描き印象に残った映画であった。



(*4:p50)



(*9)

[④The Great Dictator: 1940]

映画「独裁者」は、"The Great Dictator" encouraged the people who fought against Hitler.(＊6 :p30) {【浜田訳文例】「独裁者」はヒトラーと戦った人々を励ました} であり、詳しくは視聴覚教材でも取り上げビデオ鑑賞を予定しているし、またこの『求め続けて』でも、10章第3節のMy favorite wordsに演説の一部は掲載している。そこで、ここでは簡単にこの演説の意図したもののみを記す。

Chaplin was poor from childhood and had many kinds of hardships. He was very sensitive to the suffering of the poor. He understood both the happiness and the sadness of life. He deeply understood the misery of life without love. In the speech in "The Great Dictator" he expressed his dearest hope for humanity. He also encouraged depressed people from the depth of his heart. He was a real humanist. (＊7 :p25)

【浜田訳文例】チャップリンは幼児期から貧しく、多くの艱難辛苦を経験していた。彼は、貧しい人達の苦しみに非常に敏感になっていた。彼は、人生の幸福も悲しみも両方とも理解していた。彼は、愛なき人生の悲惨さを深く理解していた。「独裁者」の演説の中で、彼は人間性への彼の限りなき希望を述べた。彼は、また彼の心の底から、意気消沈した人々を励ました。彼は、真のヒューマニストであった。※[diprés]意気消沈した。

なお、この演説は多くの英語教材に取り上げられている。

[⑤Monsieur Verdoux: 1947] ([mɔsjɔ̃ verdú]=ヴェルドウ氏): (殺人狂時代)

映画「Monsieur Verdoux」(「殺人狂時代」)は「the war criminals」(戦争犯罪)を告発したものであり、映画「独裁者」と共に次のように言われている。

The earnest wish for peace and dearest love for humanity were the great points of Chaplin's movies. We find these points in speeches in "The Great Dictator" and "Monsieur verdoux".(＊7: p29)

{【浜田訳文例】限りなき平和への真剣な願いと人間への切なる愛情は、チャップリンの映画の大きな要であった。我々は、これらの特質を「独裁者」と「殺人狂時代」の中の演説で見いだす。}

そして、この映画の中の、次の言葉は余りにも有名である。

In 1946 he made the movie "Monsieur Verdoux"and protested the miserable mass murder. He said in this film, "If one kills a man, he is murder; but if one kills millions of men he is honored as hero. If one invents a machine to kill women and children, he is honored."(＊7: p27)

【浜田訳文例】1946年に彼は映画・『殺人狂時代』を制作し、悲惨な大量殺人に抗議をした。彼はこの映画の中で言う。「もし人が一人を殺すならば、彼は殺人者である。しかし、人が何百万人もの人間を殺せば、彼は英雄として敬意を支払われる。もし人が女および子供を殺すための機械を発明したならば、彼は表彰される。」※[ánər(ɔnə)]名誉(榮譽)を与える、敬意を払う}

尚、この映画の上映への妨害については『CHARLIE CHAPLIN』(＊5: p51)などに書かれているようにひどいものがあった。

[⑥Limelight: 1953]

映画「ライムライト」は、今までの彼の傑作の集大成とも、彼の半自伝的映画とも言われている。

一言で言えば、"It was the story of an old music hall entertainer and the young girl he helps to success." (*4: p55)

{【浜田訳文例】「それは一人の老いたミュージックホール芸人と彼が大成するよう後押しをしていた若い女性との物語であった」}。



(*12)がらがらの客席
→駿台当時に私も同じ心境の時もあった。その逆も

この映画はビデオで30分程度に編集しているので、視聴覚教材とともに視聴覚コーナーで詳しく取り上げる。その際に芸に行き詰まった、嘗ての大芸人カルベロ（チャップリン）がどさまわりをすることによって蘇った、最後の舞台での彼の目に注目してもらいたい。

芸とは何か、人間の生き方とは何かを問いかけているように、私には思えた。

だから、この映画も老いていく芸人と若きバレリーナの愛情を通して人間を問うているのみならず、仕事という面からも生き方を通して人間を問うているのである。

最後に、この映画については思想性はないものの、チャップリンに対して激しい上映妨害があったことも銘記しておいてもらいたい。

●最後にチャップリンの映画をもう一度簡潔な英語でまとめる。

Charlie kept giving the world works of high quality, while showing love and understanding for the nameless people. He showed them the happiness and sadness of life and the danger of losing love. He devoted his sympathy to their senseless sufferings. In his films he sought to convey his earnest wish to overcome whatever was against the peace, hopes and brotherhood of men. He was an author, an actor and a director, but above all he was human being with a noble spirit. These talents were all perfectly united in him. He devoted his life to the good of humanity with all his power. (*5: pp51- 52)

{【浜田訳文例】チャーリーは、名も無き人々に愛と思いやりを示しながら、質の高い作品を世界に与え続けてきた。彼は、彼らに人生の幸福と悲しみ、そして愛を失うことの危険性を説いた。彼は、名も無き人々の無意味な苦しみに自らの同情を捧げた。彼の映画の中で、彼は平和、希望、同胞愛に敵対する物は何であれ打ち破らんとする彼の切なる願いを伝えることを求め続けた。彼は著述家、俳優、監督であったが、とりわけ、高潔な精神を持った人間であった。これらの才能が、彼

の中で悉く見事に一つに融合していた。彼は、力の限りを尽くして人間性の善なるものに自らの命を捧げた。}

※senseless→無意味な : to the good of humanity→人間性の善なるものを

【◆1995年度版への補足】

〈Aアイデアの発見への道〉 (* 1; pp209-210)

Interviewers have asked me how I get ideas for pictures and to this day I am not be able to answer satisfactorily. Over the years I have discovered that ideas come through an intense desire for them; continually desiring, the mind becomes a watch -tower on the look-out for incidents that may excite the imagination - music, a sunset, may give image to an idea. I would say, pick a subject that will stimulate you, elaborate it and involve it, then, if you can't develop it further, discard it and pick another. Elimination from accumulation is the process of finding what you want. How does one get ideas? By sheer perseverance to the point of madness. One must have a capacity to suffer anguish and sustain enthusiasm over a long period of time. Perhaps it's easier for some people than others, but I doubt it.

{【新潮文庫版訳文例】 私がどうして映画のアイデアを思いつくかという質問は、何度かインタビューで受ける質問だが、いまでも満足に答えることができない。ただ長い間の経験から、アイデアというものは、それを一心に求めていれば必ずくるということを発見した。たえず求めているうちに、いわば心が想像力を刺戟するような出来事を見張る一種の物見やぐらになってしまうのである—— 一片の音楽、一夕の日没が、アイデアにイメージを与えることもありうるのだ。

わたしのいいたいのはこうなのだ。諸君の心を刺戟する対象をとりあげて、それを追求する、掘り下げる。もしそれ以上発展しそうもないと見たら、諦めてほかの対象を探しなさい。たくさんの中からふるい落としてゆくことが、望むものを見つけだす近道なのだ。では、どうやってアイデアをつかむか？それには、ほとんど発狂一步手前というほどの忍耐力がいる。苦痛に耐え、長期間にわたって熱中できる能力を身につけねばならぬ。なるほど、それは人によって難易の差があるかもしれないが、わたしは必ずしもそうは思わない。(* 3: p62)}

※watch-tower=見張り塔

look-out見張り、警戒

[diská:d]捨てる、処分する

[ilimənéɪʃən]削除、排泄

[ˈɒŋwiʃ]激しい苦痛、苦悶

〈⑧美について〉 (* 1; p448)

... 'What is your conception of beauty?' I said I thought it was omnipresence of death and loveliness, a smiling sadness that we discern in nature and all things, a mystic communion that the poet feels - an expression of it can be a dustbin with a shaft of sunlight across it, or it can be a rose in the gutter. El Greco saw it in our Saviour on the Cross.

{【新潮文庫版訳文例】 美とは死と美が偏在するという、たとえば、あの自然や、その他一切のものの中に見られる微笑をたたえた悲哀、また詩人が感じとる神秘的交換——その具体的現われは、ゴミ箱に射しこむ太陽の光であることもあろうし、ドブに落ちた一輪のバラといった場合もあるが、要するに、エル・グレコが『十字架のキリスト』に見たあれだよ、と (*3: p523)}

※[ˌɒnɪpɹɛzns]偏在(どこにでもあること)

[kəmjuːniən]霊的交渉、親しい交わり、共にすること

[dʌstbɪn]ごみ入れ

[ʃæft](ひとすじの)光線、柄

[gʌtə(r)]排水溝、the～貧民街

[ˈseɪvjər]救世主、救世主キリスト

【全体の参考用ビデオ】

生誕100年 知られざるチャップリン

<https://www.youtube.com/watch?v=0xST-xxLGI&t=2676s>

【参考文献】

- (*1)CHARLES CHAPLIN, MY AUTOBIOGRAPHY, PENGUIN BOOKS, 1987
 - (*2)チャップリン(中野好夫訳)、『チャップリン自伝・上』、(新潮文庫)、1981年
 - (*3)チャップリン(中野好夫訳)、『チャップリン自伝・下』、(新潮文庫)、1992年
 - (*4)PAM BROWN, CHARLIE CHAPLIN, LONGMAN, 1987
 - (*5)PITER MILWARD (石井清編注)『CHARLIE CHAPLIN』(桐原書店) 1987年
 - (*6)浮田恭子・野崎雅和等編注、『ライムライト』、(三友社)、1992年
 - (*7)神津毅夫編注、『チャップリンの独裁者』、(三友社)、1993年
 - (*8)林冬子・清水馨編著、『チャップリン・その愛と神話』、(芳賀書店)、1993年
 - (*9)江崎文夫、『チャップリンの仕事』、(みすず書房)、1989年
 - (*10)渡辺幸俊、『洋画ビデオ名場面・名セリフ』、(ジャパンタイムズ)、1988年
 - (*11)麦の芽編集委員会編集、『たのしい英語・3』、(麦の芽出版界)、1985年
 - (*12)江藤文夫、『チャップリン』、(岩波ジュニア新書)、1995年
 - (*13)山本茂実、『ああ野麦峠』、(角川文庫)、1980年
- 〈■ビデオの紹介〉→チャップリンのビデオとしては次のものが比較的安く入手しやすい。
- (*14)『チャップリン作品集全11巻』(発行朝日新聞社：販売ポニーキャニオン)
各3800円レコード店及び書店で購入可：問い合わせ大阪事業開発所(tel→06-201-8094)



モダンタイムズ→著作権対策で置換え検討写真 [https://en.wikipedia.org/wiki/Modern_Times_\(film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Modern_Times_(film))